

【札幌】道農協酪農・畜産対策本部委員会(道酪対)は14日、コロナ禍の需給環境を受けて行っている生乳の生産抑制について、今年度下期はさらに抑制を強める方針を発表した。昨年度目標に対して1%増にとどめていた生産量を、0.2%減の410万9,000トンまで抑える。生産抑制は来年度も継続させる。

道酪対は今年度、全道の生乳生産目標を415万9,211トンに設定。近年は生産基盤拡大で年3、4%増で推移してきた数量を1%増にとどめ、JAごとに目標数量を配分して減産を求めてきた。しかし、需給環境が改善しないため、下期はさらなる抑制に踏み切った。出荷先を農協系統以外に切り替えた酪農家の扱い次第だが、年度当初の目標から5万トンの削減になる。

生産抑制は来年度も継続することを確認。来年度の抑

制幅や下期の地区別の対応などは、今月下旬の道酪対で協議する。

JA道中央会などによると、生産抑制は全道的な取り組みで、9月末時点で目標対比99%の生産に抑えている。ただ、それ以上に飲用需要が落ち込み、脱脂粉乳やバター在庫が増加。抑制の強化は「販売環境に改善がみられていないことや、飲用乳価改定による需要の落ち込みを想定した」としている。

士幌の緑陽肉用牛牧場 最優秀賞・乳用雄肥育牛 十勝緑陽も優秀1席に・交雑牛 ホクレン道枝肉共励会

2022年10月29日(土)

ホクレンは1日、帯広市内の北海道畜産公社十勝工場で、今年度の北海道枝肉共励会(乳用雄肥育牛の部、交雑牛の部)を開いた。乳用雄肥育牛の部で士幌町内の緑陽肉用牛牧場(奥秋和博社長)の出品牛が最優秀賞に輝いた。グループの十勝緑陽牧場(同)は交雑牛の部の優秀1席にも選ばれた。

全道から乳用雄肥育牛の部に46頭、交雑牛の部に66頭(雌28頭、去勢38頭)が出品された。日本食肉格付協会北海道支所の宝谷浩支所長ら4人が審査を務めた。

乳用雄肥育牛で最優秀賞の牛は、格付けがB3、枝肉重量505キロで、肉質と重量を兼ね備えた。奥秋社長は「3等級や最優秀賞の結果には驚いた。従業員や関係機関のおかげ」と喜ぶ。今年は全道の乳牛共進会で町内の牛が好成績を残しており、「励みになった。肉でもPRできた」と語った。

交雑牛の部は、篠原正博さん(北見市)の出品牛が最優秀賞で、十勝緑陽牧場の牛も格付けがA5、枝肉重量が547キロで2位の優秀1席に入った。

そのほかの入賞者は次の通り。(関係分、敬称略)

◇乳用雄肥育牛の部

▽優秀1席＝力石和彦(士幌町)

▽優秀2席＝加納三司(同)

▽優良賞＝大野ファーム(芽室町)新上肉用牛牧場(士幌町)

◇交雑牛の部

▽優秀2席＝緑陽肉用牛牧場(士幌町)

▽優良賞＝太田充英(帯広市)サンライズ(陸別町)

【永久キャンペーン 土づくり～肥料高騰に挑む 十勝の現場から(上)】

2022年11月10日(木)

膨らむ生産費 原料の輸入依存に警鐘

肥料や家畜飼料などの生産費の高騰が、農業王国・十勝の現場にも大きな影響を与えている。多様化する経営リスクに柔軟に対応し、どう乗り越えていくか。地域や研究者の取り組みを探る。

◆所得は6割低下

「できる範囲で肥料を減らす工夫をしているが、施肥を変えるのはおっかない。それで収量が落ちれば本末転倒だし」。約100ヘクタールで小麦や豆類などを生産する音更町東和の三浦尚史さん(52)は、肥料高に直面して

複雑な心境を語った。

ホクレンは6月、主要化学肥料の平均価格を78.5%引き上げた。三浦さんが年間に使う肥料費は約1,000万円。急激な価格上昇は、国の政策がなければ作柄によっては赤字になる水準だ。管内にはビートよりも肥料コストが低い大豆に転換する動きがある。三浦さんは迷った末に